

ウィーン国際ハーフマラソン

盛田常夫



今でこそウィーンへ行くのは簡単だが、ほんの少し前まで、近くて遠い町だった。高速道路が全面開通してからまだ十年ちよっと。それ以前はジュールで高速道路が終わり、そこからウィーンへは対面交通の狭い道を急いだものだ。冬場はスリップ事故が多く、危険な道だった。列車は不法出国者をチェックするためにヘジエシュハーロムに一時も停車したから、ウィーンまで五時間近くもかかった。

初めてブダペストからウィーンを訪れたのは一九七九年春。その頃のブダペストには日本レストランがなく(ウィーンにも「東京レストラン」が一軒だけ)、国営スーパーマーケットの品揃いも貧弱で、買いたい物がほとんどなかった。だから、日本と同じような買物ができるウィーンへ行くと、一息付けた。

冷戦時代、ウィーンは東西の国境に位置する情報と生活の戦略拠点だった。東欧圏の日本大使館は外交文書をウィーンまで持ち出し、そこから本国に送る。外貨(フオリント通貨)も食料品もここで調達していた。映画「第三の男」の舞台になった戦後直後の時期に限らず、一九八九年に鉄のカーテンが開かれるまで、ウィーンは各国のスパイが蠢く街でもあった。通貨の輸出が禁止されているにもかかわらず、ウィーンの銀行ではハンガリー・フオリントの新札が割安で買えた。外貨を稼ぐために、ハンガリー国立銀行がウィーンの百%子会社を通してフオリン

まず、e-mailで(あるいは郵送で)送られてきた受付完了用紙を渡し、ゼッケン(スタートナンバー)の入ったビニール製のナップザックを受け取る。この袋にゼッケン番号と名前のステッカーを貼り付け、競技当日に預ける衣服入れとして使用する。次に、隣のカウンターに行つて、タイム計測チップの登録あるいはレンタル手続きを行う。レンタル料金は三ユーロだが、預託金として二五ユーロ払う。返却しなかった場合は、自動的に購入したものと見なされる。最後に、スポンサーの広告製品が入った袋を受け取る。

どの大会でもゼッケンは特殊な紙(人工材料)で作られていて、簡単に破れないようになっている。これを安全ピンでランニングシャツに付けるのだが、紙が堅いのでいつも針を通すのに苦労する。ところが、ウィーンの大会ゼッケンの四隅には小さな穴が開けられていて、そこにピンを通して簡単にシャツに付けられる。細かな気配りが行き届いている。

大勢のランナーと一緒にスタートするので、スタートブロックが設定されている。競技別ではなく、事前に申告したハーフマラソンの持ち時間にしたがってランナーがグループ分けされる。各自のゼッケンには、ブロック名と識別用の色丸が表示されている。片道三車線の道路を上下線とも使い、上り線に「エリート」、「A1」<「A3」の四ブロック、下り線はスタート位置を二〇m下げて「B1」<「B3」の三ブロックが仕切られ、ランナーが誘導される。AとBの距離差は最初のロータリーで相殺されるが、そこに至るまでランナーが十分に散らばれるように工夫されている。スタートとゴールが違うため、スタート地点で脱いだ衣服をビニールのナップザックに入れて、輸送トラックに預ける。この預け荷物がある人はスタート地点に近い国連本部前で降りずに、もう一つ奥のUバーン

一五〇〇チームが加わった。携帯へ送られてきた最初のSMSを確認すると、先頭がスタートして私がスタート地点を越えたのが四二秒後で、ハーフマラソン参加者中三四二番目にスタートしたとある。ゴールと同時に送られてきた二番目のSMSによれば、ネットタイムが一時間三二分五三秒で、平均時速一三・五七km、一km平均四分二四秒、全体順位二七一位、五五・五九歳の部八位とあった。さらに、競技が終わった後に送られてきたSMSでは、年齢別順位は同じだが、全体順位は二六位下がつて二九七位とあった。私のが、全体順位は二六位下がつて二九七位とあった。私

ブラハの記録に比べて、三分二秒縮めた。百m平均で一秒の短縮になる。本格的なトレーニングを再開して間がなく、九三分を切るのは難しいと思っていたから、今回の結果にも満足している。競技終了後、大会のホームページに、ネットタイムによる順位、五kmごとのラップタイム、最後の一・一kmのラップが揭示された。私の五kmのラップは、二分四四秒、二分〇四秒、二分二四秒、二分一四秒、二〇km地点のスプリットタイムは八八分二七秒。事前の目標を五km平均二分ちようどに設定していたから、この時点で二七秒オーバーだったが、残りの一・一kmを四分二六秒でまとめ、最後に帳尻が合った。コース終盤のマリアヒルファーの下り坂を利用して、ペースを上げるのはシナリオ通りだった。完治していないが、膝が良くなった分だけ、ブラハより気持ちよく楽に走れた。

これで春のハーフマラソン挑戦は終わり。秋のブダペスト国際大会を目指して、五km、一〇kmのスピードを上げるトレーニングに励む。故障さえなければ、九〇分を切るのは難しくないが、どうなるだろうか。

ト通貨を流していたのだろう。諸国の外交官たちがこれを割安で買い、ハンガリーで使う。両国政府ともに暗黙の了解事項だった。もつとも、民間人のフオリント通貨輸入には大きなリスクがあったし、これに纏わるエピソードは数え切れない。

ハンガリーは一九八九年春に国民の国外旅行を自由化した。この年、ハンガリー国民は一〇億ドル近い外貨を引き出し、主としてオーストリアでの買い物に当てた。ハンガリー国境近くのオーストリアの村々には俄仕立ての電気店が開店し、スーパーマーケットにはハンガリーの団体バスが横付けした。ウィーン中心街のマリアヒルファー通りにも、ハンガリー・ナンバーの車が溢れ、トラバントの屋根に冷凍庫を積むハンガリー人も多かった。

それもこれも、今ではもう昔話となつてしまったが、それほど古い話でもないのだ。

コースを知る

ウィーン国際マラソン大会は、都市ウィーン最大のイベントと言ってもよい。マラソン、ハーフマラソン、マラソリレーを同じコースを使って同時スタートさせる。このほかに、ジュニアマラソン(四・二km)、一〇歳以下の一km走があり、すべての競技の参加者はヘルデンブラッツのゴールを目指す。参加者総数はおよそ二万人。同伴・応援者を含めると、中心

駅(Alte Donau)で降りる。大通りにほぼ二〇台の大型トラックが配置され、スタート四五分前まで荷物を集めてゴール地点へ運ぶ。

一km近い道路が発発ゾーンに当てられていて、この周辺にかなりの数の簡易トイレが設置されている。ウォームアップで体を温めると新陳代謝が活性化するので、トイレが近くなる。道路沿いのホテルでトイレ



スタート直後のReichsbrückeライヒスブリュッケ／大橋

レを開放しているところもあった。場所によって行列の長さが違うから、要領よく用を足すことがポイントだ。インターネットで携帯電話番号とゼッケン番号を登録すると、スタートとゴールの個人情報が一アルタイムにSMSで送られる。登録電話番号に制限がなく、スポンサーが無料でサービスしてくれる。フルマラソンの参加者には、五kmごとのラップタイムや予想

気になったこと

どの国際大会でも大会専属のカメラマンがランナーを撮影している。ブダペストの大会では、撮影された写真は大会本部のホームページにアップロードされ、誰でも自由にダウンロードできる。ところが、他の大会では自由にダウンロードできない仕組みになっている。ブラハの大会で分かったことだが、国際陸連やAIMS (Association of International Marathons and Road Races) とタイアップしている会社がいくつかあって、それらが各大会の写真撮影の独占権を持つているようだ。あるいは、それらの「公認」会社が、各国の組織本部と何らかの契約を結ぶのかもしれない。ブラハ大会のホームページの写真集をクリックすると、英国の写真販売会社のホームページに変わり、大会名とスタートナンバーを打ち込むと、当該ランナーの写真が表示される。その中から気に入ったものを選び、装飾パターンと枚数を指定する。たとえば、賞状形式、絵はがき形式、通常の手形サイズ等の形式を指定して注文する。ところが、そのどれも安くはないのだ。賞状形式が二五ポンドで、手形サイズでも一五ポンドもする。

物は試しと思つて、ブラハ大会の写真を一枚注文した。先日、その写真が届いて驚いた。解像度が悪く、ふつうの写真用紙に印刷しただけの粗末なものだった。これが二五ポンド、五千円だ。国際組織や大会組織がこんな粗悪品の販売を認めているのはどうしてだろうか。残念ながら、ウィーンの大会も撮影をアウトソーシングしている。「Fotosecure」をクリックすると、やはり英国の別の写真販売会社が出てくる。こちらの会社の価格はブラハ大会の会社のほぼ半額だから、少し良心的だと言えるが、それでも高すぎる。組

街は数万の人で膨れあがる。

スタートはドナウ河を越えた国連本部前。そこから大橋(Reichsbrücke)を渡り、対岸のメキシコブラッツ(ブダペスト行き船着き場)からブラーター(遊園地)へ。ブラーターを縦断し、ドナウ運河沿いの道に入る。ウラニア(プラネタリウム)からリング通りに入り、国立オペラまで行く。そこから、リングを離れて青空市場(ナツシユマルクト)を横手に見て、シェーンブルグ宮殿前を通り、方向を変えてマリアヒルファー通りに入る。左手に西駅を見て、マリアヒルファーをリングに向かって下る。ハーフマラソンはヒルデンブラッツで終わるが、フルマラソンはそのままりんぐを走り、途中でリングを離れてドナウ運河まで行き、そこから運河沿いに下り、再びリングに入って、ヒルデンブラッツにゴールする。

車の運転と同じで、コースを知っていると知らないのでは、心理的な余裕が違う。ナツシユマルクトからシェーンブルグへの二二kmから一八kmが三〇mほどの登りになる。逆に、最後のマリアヒルファーからリングへは下りになる。この種の情報はありがたい。最初から覚悟して走ると、知らないで無駄なエネルギーを使うのでは、疲れが違う。

大会組織にみる文明度

年に一度の行事とあって、大会は非常によく組織されている。どの国際大会も競技前二日間、参加者受付とスポンサー展示会が開かれる。ブラハの会場はプレハブ建ての小さな小屋だったが、ウィーンの会場は国連本部横のオーストリアセンターの大催事場。同伴者を含め、三万人程度の訪問客を受け入れるために、入口と出口は一方通行で規制されていた。

ゴールタイムも送られ、同伴者の応援の便宜を図っている。一kmごとに二mほどの高さの距離表示板が設置され、五kmごとに給水場があり、医師も待機している。二五kmからは五kmごとにマッサージ師が待機し、ゴールでもマッサージを受けることができる。

コース沿道は応援の人々で溢れていた。ゴール近くのリング周辺およびヘルデンブラッツの道路際には金網が張られ、観客の流れで競技の進行が阻害されないように厳重に管理されていた。ゴール両側にはスタンドが設けられ大勢の観客の中をゴールする。

ゴール後の記念メダルの受取り、給水場、参加記念グッズの受取り、出口への誘導はうまく組織されている。ただ、この背後のスペースが狭いので、集団でゴールする時間帯には数百人が行列して、出口に辿り着くまで三〇分もかかったようだ。これだけ時間が経つと体が冷えるので、一工夫が必要だ。ちなみに、ハンガリーのフルマラソン大会では、ゴール地点で頭からかぶって着られる大きなビニールを渡し、体が冷えるのを防いでいる。

それにしても、ウィーンの大会は本当に良く組織されている。ブダペストでは通行止めになった車の運転手が、整理の警官とやり合うのを何度も見ている。それに比べて、ウィーン市民の理解や協力も十分に見た。個人的には朝九時出発はきつかった。六時前に起きて一度体を覚ますアップが必要だから、それから朝食をとったのでは走れない。せめてもう一時間遅らせて欲しいところだ。ブダペストは一〇時、ブラハは二時出発だ。気持ちよく走る

今年のハーフマラソンの参加者が五三〇〇余名、フルマラソンが五五〇〇余名。これにマラソリレーの

織委員会は品質と価格をチェックして、会社を選定すべきだ。せつかくの優れた大会組織に水を差すようなサービスだ。画竜点睛を欠くと言わざるを得ない。

後日談

ブラハではいくつか嫌なことを体験した。五つ星の名の通ったホテルに泊まった。チェックアウトでは宿泊料を確認して、クレジットカードで支払った。後日、ブラハと一緒に同行した友人から電話があり、宿泊料以外に別の請求が差し引かれているという。急いで私のカード決済の記録をインターネットで確認したら、やはり宿泊料以外に、百ユーロ近い請求が付加されていた。ホテルに問い合わせ、この請求書の明細を送るように指示した。FAXされた請求書には、ゴルフボールセット、ファンタ、ウイスキー、インターネット使用などまったく覚えのない項目が列挙されていた。友人の場合は、ミニバーが空だという説明だった。

即座の抗議に、ホテル側はすぐに返金の手続きをとったが、何か腑に落ちないものを感じた。従業員がくすねた可能性は否定できないが、ホテル側が故意に適当な請求書を作成して、カード引き落としを勝手に行ったと考えられないこともない。まさか五つ星のホテルがとは思うが、階の違う二部屋で従業員が短時間のうちに部屋の付属品を持ち出すことがあるのだろうか。

このほかにも、観光名所のレストランで気まずい体験をした。ブラハの街はとても綺麗だが、一九九〇年代初頭のヴァウチャー民営化というインサイダー民営化を行った後遺症が、個人や事業主の行動に悪い影響を与えているのではないだろうか。そんなことを考えさせる出来事だった。